

第3回 滋賀県社会教育委員会議 概要

【期 日】平成25年6月11日(火)

【場 所】県庁北新館5-B会議室

1 開 会

○神部委員長挨拶

2 議 事

- (1)「学校と地域の持続可能な連携方策」について
- (2) その他

3 閉 会

○北野課長挨拶

【出席委員（五十音順）】

伊藤委員 今居委員 神部委員 北村委員 西條委員 他谷委員 富川委員
野一色委員 松浦委員 三田村委員 宮治委員 山口委員 山元委員

〔議事の概要〕

【委員長】

本日の会議は第3回ということになります。今日を入れてあと2回ということ、本日の会議では、答申案骨子を示させていただいておりますが、今後、本日いただいた皆様のご意見を含めて文章化していきたいと思っております。皆様の意見を入れるラストチャンスということになりそうですから、とりあえず、いろいろな意見を土俵に上げるということで、皆様の活発なご意見をお願いします。

それでは、早速議事の方に入りたいと思っております。基本的にたった一つ「学校と地域の持続可能な連携方策」について、だいたいこういう内容で答申を書いていくという方向、項目については確定させていく方向で、今日の審議が進められるようお願いいたします。

まず、骨子（案）について、事務局より説明の方よろしく申し上げます。

【事務局】

○資料「学校と地域の持続可能な連携方策」について 答申（案）骨子について説明。

【委員長】

全体を通して聞いていただいて、質問・意見がありましたらお聞きしたいと思います。いかがでしょうか。

効果的な運営を考えていく時、学校支援地域本部事業を成功させる、左右するのは、やはりその間に入っていただく地域コーディネーターの役割が大きいこと、そして、学校支援ボランティアの活動を行っていただく人たちへの対応と、そして、間口というか、裾野をどうやって広げていくのかということ、そして、最後に、その受け入れ側である学校の課題、調査を見てもなかなか難しい課題があると思われませんが、学校の先生方の意識改革というものをどのように進めていけばいいのか、だいたいこのような4つの柱で答申を考えていこうとしているところです。事務局よりの提案ということでございますが、これまでいただいた皆様の御意見を整理させていただくと、だいたいこのような形にまとめられたということです。

特に御意見がないようでしたら、大まかな柱については、ご了承いただいたとして、この柱に沿って考えさせていただくということで、よろしいでしょうか。

それでは、具体的に見ていくこととします。

「はじめに」「Ⅰ. 学校と地域の連携体制構築の意義と現状」では、学校だけが得をする活動ではなく、学校支援ボランティアさんが学校に関わることで、ボランティアさん自身にとっても、いろんな人たちが学校を支援することによって、学校という場に人が集まってきて、そこで新たな横のつながりをもつことで、最終的には地域そのものの活性化にもつながり得る。そういう活動であるということ、学校教育だけの問題として扱うだけでなく、社会教育の視点からもこうした学校支援ボランティアの活動を学校支援という面で見なければならぬと思います。

こうした学校支援を地域をとおして、どのように推進していくか。社会教育の視点からも学校支援を考えていかなければならないということ、私たちにとっても大変重要なことであると思われま。決して地域は学校のお手伝いではないのであって、地域の方々もいっしょに成長していける、そういう場だからこそ、大事であると言えるでしょう。

さて、課題はこのあとのⅡ章以下となります。1. 効果的な運営のあり方 2. 地域コーディネーターの養成と資質の向上 3. ボランティア活動の充実 4. 学校・教職員の意識改革という順で、見ていくこととしましょう。学校支援ボランティアへの対応については、どのように裾野を広げていくのか、全国的に見ても課題となっています。また、学校の先生の意識改革をどのように進めていくのかなどです。

全体についての意見がないようですので、4つの柱を具体的に見ていくこととしましょう。

まず、「効果的な運営のあり方」についてです。学校や地域によって、いろいろな運営の仕

方があるということ、そういうもののメリット・デメリットというものを整理してみると、やっぱり小学校区ごとに、こうした地域教育協議会等の組織があることが望ましいということ、そういう中で学校支援というものを行っていくということ、そういうやり方が一番効果的であるということが見えてきたように思います。私たちの提案としては、学校支援地域本部というものを立ち上げる時にはできるだけ、小学校区というものを意識して、立ち上げていくということが大事なことになるのでしょうか。そのあたりについて、皆さん、ご意見はいかがでしょうか。どうお考えでしょうか。

事前に委員のお一人からご意見をいただいているんですけども、質問が書いてあったようですので、まず、聞いておきましょうか。「誘導」という言葉の意味については、いかがでしょうか。

【委員】

仕事柄ちょっと表現にはひっかかるものがありまして、申し訳ございません。きちんと確信をもってやっていただくということは大事なことですし、何かそれよりもきちんと理解をしてやっていただくという努力をして、そして、まとめていただくという、そういう表現でいいかなと思います。最初に拝見した時には、誘い込むという感じを受けましたもので、どうかなという印象をもった次第です。

【委員長】

表現的には、ちょっと誤解を生みそうな受け止めをもちますので、表現方法についてですね。

【委員】

そうですね。具体的な方法を示された方がいいのではと思います。その方が説得力もあるように思うのですが。

【委員長】

そのあたりはいかがでしょうか。意味というか、意図のようなものはいかがですか。

【事務局】

これまで審議いただいたことを受けて、推進母体となる組織・協議の場が各学校ごとにある方がより意識が高いということを取りまとめようとしたものです。具体的な働きかけはなかなか難しいことだと思われまして、十分な議論ができていない現状から、理解していただくということに努め、そのことが大事であると呼びかけていくという柔軟い表現で、まとめられたらと考えております。

国の動きとしては、学校支援地域本部設置を全国公立中学校の1割程度を目標にしていることから、県としては施策の中に具体的にどのように盛り込んでいくか、また、各学校ごとに推進母体となる組織の設置が本当に可能かどうかも含めて、今後の検討課題とさせていただきたいと思います。

この「誘導」という表現は、学校支援地域本部事業の中で、基本的には補助事業として行っておりますので、各市町教育委員会の判断、各学校における判断で、本部をどこに置くかということ委ね、例えば本部を中学校区に置いて域内の小学校を考慮する場合、また、教育委員会事務局内に置いて管内の学校全部を考慮する仕組みもございますが、ここで皆様方からいただいたご意見を振り返ってみますと、小学校に本部があって、その小学校だけを支援するという仕組みが大変有効であるのご意見をいただいておりますので、例えばスタート地点で、学校支援地域本部事業を小学校区に設置する場合には重点的に補助を行うなどのことができないか、中学校区ではなく、小学校区に設置していくということへの財政面での支援を行っていくということで、この言葉を使わせていただいているところです。けれども、学校支援地域本部事業だけのことを言っているわけではないですので、確かに表現としてはどうかと思うところもございます。

【委員長】

なるべく小学校区をエリアとした支援本部づくりを進めていくということ、何らかの形での支援を行っていくという、そういう意味での「誘導」ということですね。柔らかい表現で、まとめていくということで、他にご意見など、いかがでしょうか。

私たちの提案としては、小学校区にという考えを提案していくということについて、その方向でよろしいでしょうか。

【委員】

以前にもお話しさせていただいたんですけど、文科省が「こういう形でしてくださいよ」との意見を取り入れると、諮問を受けると何かやらなければならないということになります。学校側の方もすつといけるんでしょうか。例えば組織をつくるという前提ですと、学校にとっては組織が2つできるんですね。一方では自主的と言っているけれども、学校がこの体制を受け入れていくだけの余裕があるのかどうかも大事なことだと思います。気にかかるんです。

そのところの関係を整理して、慎重な取組として考えるべきで、文科省は予算・補助金がある関係で、大きいエリアでしか、補助金の関係でしか見られない。地域におろしたら、学校の負担がものすごく増えるんです。そういうところをもっと丁寧に扱ってほしいと思うのです。結果的にモデルというか形があって、いろいろ意見を言っても、最終的にモデル案になる。子どもと学校と教職員と地域と本当にうまくいくのかどうか、こういう形のもが片方では理想を求めていくけれども、現実とはどんどん開いていくような感じがあります。

学校と子どもたちが現実とのギャップをいかに埋めて、「三方よし」にもとづいた理解のなかで進められていくようにしてほしいと思います。

アンケート結果が典型的にいいことなんだというイメージで書かれているんですけども、それがすべてではなく、何かこういう事例があるんですよというような書き方に留めておいていただければなと思います。

それと一番最後のところですね、学校の先生の評価のことまで書いてありますけど、ここまで踏み込むべきかどうかということはずいぶん、こういうふうにした人は点数が上がるんです

か、ちょっとこれは介入しすぎだと思います。個人的には、ここの部分は削除していただきたいと思います。

【委員長】

P T Aが主体となって行うなど多種多様な運営の仕方があるわけで、こうあるべきだという画一的な運営の仕方を提案するよりは、いろんな例を示して、あとは学校や地域の実情に合わせてやっていく、一番ふさわしい運営の仕方というものを選択して、やっていけばいいという形でまとめようとしているところです。組織が2つあって大変というところは、P T Aが担う役割を明確にして、P T Aに何でも任せるというのでは良くないと思うところは、新たな組織をつくってもお互いに協力し合って、あくまでも学校の実情、地域の実情をよく考えてやっていくべきだという、そういう方向で結論を出していく、まとめていくということによろしいでしょうか。

【委員】

骨子全体は、すごくきれいにまとめられていると思います。0からのスタートなら、この組織ってすばらしいものだなあとと思います。具体的に組織をつくった時に、誰がメンバーになるのかということを考えていく時に、現存の組織以外の人とその新しい組織に入るなら、例えば、私は初めて大津市の子ども会連合会の学区の会長になりましたが、会長になると、地域の防犯協会、それから交通安全、青少年育成学区民会議、それから学区社協、人権教育推進協議会などすべて委員になりまして、今日も朝から「花いっぱい運動」等のことで、役割分担がありますからお願いしますとの連絡が入ったほどです。例えばこの組織ができた時に、「来てね」と言われてもこれ以上「いっぱいいっぱい」という感じで、一般の親には負担が大きすぎるのではないかと思います。自分の家のことは後まわしで、地域のこととかを続けているような状況です。

こういうふうに組織ができた時、誰がどこに参加するのか、よく考えていかないと大変ではないでしょうか。そのあたりはいかがでしょうか。

【委員長】

そういうことも含めて、こういう組織でやっていく、こうでなければならないというわけではないですよね。じゃあ誰がメンバーになるのか、地域のメンバー等をよく考えて、推進組織をつくっていくということになるわけですが、会議には出るしかないわけですから、よく考えた選考を行っていくべきでしょう。

推進組織となる地域教育協議会には、必ず誰と誰が入っていないなければならないということではないですし、そういうしぼりはなくて、それぞれの地域のなかで、どういうメンバーがいいのか、考えていくべきでしょう。

【委員】

大津市のシステムに合わせて形から組織をつくると、誰がその役になるのか、例えばP T A会長になると、さまざまな役をしなければなりませんし、P T Aの役員になると地域のまちづくりの役まで回ってくるということもあります。だから注意したいのは、形から組織をつくっ

ていくと、いくら推進すると言っても、つくるところからスタートするということになると、また、同じことが起きると思うのです。既存の団体のどこかから人をもってくるといった、そういうことにならないように、もっと自主的な組織でないと、今までと同じ状況になってしまうのではないかと思います。

【委員長】

そういう色合いは出ていると思うんですけどね。

【委員】

保護者という立場と組織の立ち上げから地域コーディネーターをさせていただいている立場と、両方の立場から聞かせていただいて、先ほどから、なるほどなと思って伺っていたんですけども。

P T Aとボランティア組織の2本立てでいくと、私の学校でもどちらに主体が置かれるのかという課題もございました。それと、入り方がわからないということもございまして、入れないと思われる保護者の方もたくさんいらっしゃって、コーディネーターの立場から見ますと、これはボランティアという集まりなので、できる方ができる時にできることをということが根本であって、そこをご理解いただく。強制ではなくて、本当にお手伝いをしたいと思う時に、お手伝いができることを一番ぴったり合う時に来ていただいて、参加していただくということだと思います。

そういう意識というか、認知が低いというか、学校支援ボランティアの認知度が低いと思います。校長先生はご存じですけども、他の先生方のなかにご存じではない方、学校支援ボランティアって何？と思っておられる方もいらっしゃいます。

この資料をいただいた時から思っていたことなんですけど、作成した答申を読めるのも校長先生や私たち社会教育委員、コーディネートをやる立場の者など一部の人だけではないかと思えます。本当にお手伝いしたいと思ってるんですけど、なかなか理解されないのではと思います。

私はもともと読書ボランティアをやっていたんですけども、組織になってしまうと、何が違うのかって考えていたんですけど、組織になってしまうと、保護者の立場から言うと役員になるというイメージで、1回入ったら、いろいろと役がふってきて抜けられないのではと心配する保護者が多いのではないかと思います。今年度入っていただいても、思いが違えば、また来年度は「全然大丈夫なんですよ」ということ、そういう気軽な感じでいいということを一般の方はわからないと思うのです。

こういうのが始まったし、私やったらやれるのではないかなあと考えていただけのような、広く知っていただけのようにしていくことが大事だと思います。なるほど、なるほどと思って読ませていただいていたので、根付いていくには3年くらいかかるとは思いますが、継続していくことを考えると、広く広報していただくことが必要ではないかと思えます。

【委員長】

流れとして、運営組織はこうならなければならないとは言わず、ただ、こういうやり方でやられているという多様な事例を示しながら、少しでも支援事業の取組への理解を深めてもらっ

て、基本的には学校、地域、それぞれにあったやり方で、そして、みんなで考えていくということ、協力を求めていくということが必要だということですね。

これまで出てきたご意見を踏まえ、事務局としてはいかがでしょうか。

【事務局】

委員長が今おっしゃったように、こうあるべきだと決して強く言及しているつもりはございません。これまで委員の皆様から頂戴しましたご意見をもとに案をまとめていきたいと考えております。あくまでも学校や地域の実態に応じた運営方法を見出していくことが大切であり、運営体制を構築していく際に、地域のいろいろな人との関わりをもつということが重要であり、望ましいという表現にしていってはどうかと思えます。

本日お示ししましたものは、骨子案でございますので、これをもとに答申案はあくまでも呼びかけるような言い回しで、わかりやすく、柔らかい表現にしていってはどうかと考えております。

【委員長】

各委員の皆様のご意見を汲み取っていただき、今後、文章の方を作成していただきたいと思います。

さて、活動経費の確保という点では、補助金が減額されるなかで、私たちが考える独自の財源確保が必要あるということ間違いのないわけで、ただ、市や県が丸投げでは困るということございまして、学校と地域を豊かにする組織を住民主体で立ち上げていく、地域の活性化を図るという意味では、それが地域にフィードバックされていく、地域づくりのための組織を立ち上げてやっていこうとするもので、このことが地域を豊かにするとうことにつながっていく。ですから、そのようなことを受けて、やはり、県は積極的に財源の確保、財政措置を講じていくという努力を怠ってもらっては困りますということでしょう。

独自の財源確保と行政による支援と両方の視点から考えていくことが必要です。私たちとしては、この2点を強調していくということでもいいでしょうか。

さて、次に2番目の「地域コーディネーターの養成と資質の向上」というところでは、地域コーディネーターの役割や能力、どういう力が求められて、どういう研修をしていけばいいのかという3点構成のまとめ方を提案されています。

資質の向上、理解が学校支援地域本部事業を左右するほど重要であるということから、養成や資質の向上をしっかりとやっていくということですね。これはこれまでいろんな方々から聞こえてきたことで、押さえておくべきでしょう。

このあたりでは、いかがでしょうか。

役割としては、「つなぐ」「知らせる」「育てる」「支える」という4つの役割が必要であるという捉えで、さまざまなボランティアに関する情報収集と発信、また、ボランティアがやりたいこと、できることを学校へ伝える、あるいは学校がこういうボランティアを必要としている、こういう人を求めているということなどをつないでいくということですね。そうしたこと

をとおしてボランティアを育てていくということも考えていかなければならないのでしょう。ボランティアが学校と地域とこれまで相容れなかった関係のなかで、いっしょになってやっていこうということを提案していくわけですから、いろんな軋轢だとか理解不足だとか、いろんな問題が起こるかもしれませんが、そんな時、間に入って、ボランティアや学校の相談にのったり、いろんな形の支えが求められるのでしょう。

また、人と人との間に入って、地域と学校の間に入ってとりもつ、よりよい人間関係を築くということが大切で、コミュニケーション能力が求められます。

こうしたコミュニケーションの力は、学びをとおして培っていただけるよう、高めていただけるよう、そういった研修が必要になってくると思われます。そこをしっかりと押さえた上で、具体的にどのような研修をやればいいのかが見えてくるわけで、コミュニケーション力を高める研修、それは座学も必要なだけけれども、参加型の学習、実際に主体的に参加して、そして、ディスカッション、あるいはワークショップ、あるいはロールプレイングなどをとおして、コミュニケーション力を身に付けていく工夫をしていく必要があります。

また、資質向上のためのハンドブックの活用、地域コーディネーターの支えとなるようなものを作成してはどうかという投げかけがここでは書かれています。

皆さん、いかがでしょうか。

【委員】

地域のコーディネーターを設置するとうことが必要とありますが、その前段に学校からもボランティアからも独立したという表現がなされておりますが、それは中立の立場で「やってくださいよ」ということだと思んですが、設置をする時にですね、誰が1本づりのような形で、そういう方を探してこられるのか、教育委員会がその地域で「あなた、やってくださいよ」というのか、どういうルートで決められていくのか、まず、それを教えていただけませんか。

【委員】

教育委員会がこの人というのではなく、やはり地域をよく知っている校長が、この人なら、この人でしかという人を見つけ出してきました。地域の実情をよく知っている人をこちらが指名していくというのがいいんじゃないかと思えます。なぜそのようにするかと言いますと、地域の各団体長さんとかの会議に、会長ではないんだけども参加されているという方、地域のためとか本当に子どもたちのためとか、「何かできることがあるのであれば、力を貸しましょう」という方がおられて、会長ではないんだけど、すごく意欲的に動いてくださる方がいい。それぞれにどんな事業があるとか、地域のこの方は、〇〇が得意だとか、この方は〇〇に秀でておられるとか、そういうことをよくご存じで、また、自分自身も意欲的な方がいいと思えます。

ただ、一方では、そういう方に正々堂々と活動していただけるお立場と、そのために、そういった人がやる気をもってやっていけるような支援のための金銭的な負担があればいいと思います。

各団体間の連絡調整等は公民館の生涯学習専門員等に入っていたりすると、事務的処理は速くできるということがあります。そういう地域の機関と地域コーディネーターとをセットとして、動かしていくと、新たな人材を見つけたり、学校をこうしたいという願いをもった

方々とフィットしたりして、連携もうまく進むのではないかと思います。

ここで示されている4つの役割というのは、本当に素晴らしい視点であると感心しておりました。次に「求められる力」として情報集能力、企画・立案能力といったコーディネート技法・力とありますが、情報を収集するだけでなく、発信していくこと、そして、具体的に実践していくということも大事だと思います。具体的に実践して人を動かす力も大切だと思います。

【委員】

校長先生がリーダーシップをとって、PTAの役員さんなど、考えていくのもいいんでしょうね。まずはお互いに、「誰かいい人いいひんかな」と相談されることが大事なんでしょうね。

【委員】

PTAは会則がありまして、PTAの会則のなかで動かなければならないので、一方、ボランティアさんはもっとフリーで、自由に動ける立場で、会則とかに縛られずに、地域のためとか子どもたちのためとか動ける。先ほど教えていただいたように、必要なことを必要な時にやりたい人がやりたい時に、できる力をというスパンで、やっていくのがいいと思います。

【委員】

地域には老人会だとかいろいろな会があるが、それをうまく取りまとめていける人がいいんでしょうね。

【委員長】

いろいろな人脈があるといいということですね。

【委員】

ただ、1本づりというとうれしいようで寂しいですよ。校長先生からの指名の1本づりでは認知度は上がらないと思います。責任は重いにもかかわらず、認知度が高いとやりがいも出てくると思いますが、地域のなかでどうしていくか、認知度をどう上げていくかということも必要だと思います。

【委員長】

前回の話し合いのなかで、調査結果等を分析して、小学校区にそういう人を1人位置づけるというのが望ましいという方向が確認できていると思いますが、中学校にいくとおそらく疎遠になってしまうということが懸念される、円滑に進めようとする、小学校区にそういう人を1人位置づけるということがより効果的に進められるのではないかと思います。

それでは、10分間の休憩を入れさせていただきます。

《休 憩》

【委員長】

さて、時間が来ましたので、残りのところを協議していきたいと思います。よろしくお願ひします。

地域コーディネーターに対するご意見をいろいろと頂戴しましたが、校長先生が地域の方々を見て、これぞと思う方、地域で人脈をもっている方を1本づりで指名されるパターンが多いということでした。データを見ていると、各自治体の関係者であったり、学校支援ボランティアのなかで一番リーダーとして信頼できる人を選んだりとか、あるいは、退職された先生にお願いするとか、行政関係者（社会教育主事等）を選んだりとか、連携を進めやすい人選をされていて、多種多様な人が活躍していただいているようです。言うまでもなく、底上げのためにも、研修を通じて一人一人の力を高めることが大事になってくるわけですね。

研修は、座学だけでなく、学校支援ボランティアそのものの理解と学校運営方針の理解も大切で、基本は学校の求めに応じて活動するということになりますので、学校の方針の理解に努めながら、相互理解を深め、つなぐ役割を果たしていただくということの意識が培える研修の場を大事していただくということを押さえておきましょう。

さて、残り2つの項へと進めさせていただきます。新たなボランティアの確保という意味では、重要なポイントとなるところでしょう。どうすればもっと底辺を広げられるか、一部の人が頑張り、なかなか広がらない。社会教育や生涯学習の視点から見ても、こうした学校支援ボランティアの裾野を広げることが大事で、学校だけに収まるのではなくて、どんどんと地域へと波及していく、つながりが広がっていくことを期待しているからこそ、学校支援ボランティア活動を支援していこうという動きなんです。

まず、ボランティアの現状にふれ、そして、ボランティア活動の充実、やはり、学校支援ボランティア活動が魅力のある活動でなければ、なかなかそこに入っていこうとされる、いっしょにやっていきたいという人が少ないのではないかと思います。そういう意味では、ボランティア活動の質の充実ということが大切だと思いますし、また、量的な面での拡大ということも考えながら、(3)として「ボランティアの確保」という項を設けて、どうすれば、もっと多くの人たちが、実際にやってみようかなあとなるか、3つくらいの構成で書いていただける方がいいのではと思います。

また、学校支援ボランティアの方が一生懸命やっているのに、学校の先生方が感謝しなかったり、態度が悪かったりして、ボランティアの方々が居心地の悪いような現状ではだめだということ、ボランティアに充実感や満足感を感じてもらうことが大事であり、子どもから見ても、学校側もボランティアの方々も、みんなが喜んでくれているというような状態が理想。学校の先生方もいっしょになって、学校の先生方も、良かったことや悪かったことをしっかり伝えて、そして、そのことが結局ボランティアの皆さんのやりがいや成長につながっていくということを押さえておきたいですね。子どもたちが喜んでくれたことや先生方も喜んでくれたこと、「」や「よかった」という思いがボランティアの方々の口コミで広がっていくと「私もやってみたい」という人が増えていく。そういう理想的な展開ができてくるといいと思います。

それから、満足感や充実感を味わっていただくためにも、学校支援ボランティアの環境という面で考えていくと、ボランティアの皆さんの居場所をつくってほしいと思います。ボランテ

ィアとして学校へ来たけれども、どこに行ったらいいのか、居場所がないというのは、ちょっと寂しい感じですね。用事がなくても近くに来たので「ちょっと寄ってみた」という気軽な感じで、学校の中にボランティアルームのようなものがあるといいですね。

居場所があるというのは、結局はボランティアの皆さんに対する感謝の気持ちを伝えることにもなっていると思います。学校として「受け入れている」という気持ちを表すことにつながっていくと思います。

それでは、学校支援ボランティアのために、どのようにして、よりよい環境をつくっていくか、どうしたらいいか、ここに書いてあること以外でも結構ですので、いかがでしょうか。思うことがあれば、ぜひ、ここで出してみてください。

【委員】

いつも思うことなんですけど、ボランティアという言葉が何回聞いても「奉仕」としか捉えられず、「奉仕」「奉仕」と聞こえてくるんです。初めからやることが決まっていて、〇〇募集なんてくると、やっぱり、「ありがとう」と言ってもらわないと満足しないという面があるかもしれませんが、本来はやりたいことがあって、自分から地域のために行動に移したい、やりたいからというのがボランティアだと思います。全体的に流れのトーンが、手伝ってほしいとか、呼びかけに応じてほしいというニーズに応じる人だけを募集しているという感じがして、そうではなくて、子どもたちのことを考えて、地域のことを考えて、提案するという考えから、参加するシステムにしないとだめなんじゃないかと思います。

そのところが大事で、やりたいテーマがあって、地域のためにはこれが必要だという考えから行動します。「こうしたい」「ああしたい」というのが反映されるならば、お礼など言われなくても満足できるはずではないかと思います。お礼だとか、感謝だとかということが出てくるのは、主体的に関わっていないからではないかと思います。企画段階から参加できるような、自分の思いが反映されるような進め方がされるといいと思います。

そうすると、今度は学校の方が、地域の人がいろいろ言うので大変になってくるのでは？と思う面もあります。そのあたりは、学校はどのように受けられるのかなというところを聞いてみたい気がします。

最近「赤ちゃんボランティア」というのがございまして、実際に学校へ赤ちゃんを連れて行くというものですが、やってみたいという思いがありますが、学校は時間の保障をどのようにしていただけるのか、休み時間とかに出かけていって、この取組をやってみたいと思うのですが、学校の先生方は時間調整とかが難しいでしょうし、やはりジレンマみたいのが出てきて、やりたいことと、やってほしいことの摺り合わせが本当に上手にできるのか、十分考えていく必要があるのではないかと思います。

【委員】

昨年、石部小学校に寄せていただきましたが、あの時にすごく感動したことがありまして、皆さんがボランティアとして活動されていて、その時は大学生の人が音楽を教えたり、おじいちゃんたちが休み時間に竹トンボを教えたり、すごく生き生きと皆さんが楽しそうに活動されていて、それはどんなふうにして、このようなつながりができてきたのかなど、後で校長先生

からお聞きしたんですけど、すごく学校との連携がとれていて、ボランティアさんの部屋もあって、1年生から6年生まで、畑の作業に来てもらうことや読み聞かせに来てもらうこと、調理のお手伝いに来てもらうことなど、いろいろな支援をうまくコーディネートされていて、また、ボランティアさん同士の研修もされていて、広がりがどんどんできていると感じました。自分たちもやりがいをもって、楽しく取り組んでおられる様子が見られて、これが大事だと改めて感じました。

私の住んでいる市では読み聞かせに行っているボランティアさんがいる程度の取組で、まだまだなんですけども、そういうつながりをもつコーディネーターが出てきて、研修を積んでいけば、ボランティアさん自身も勉強になるし、高齢化社会ですので、子どもたちの刺激を受ければ、認知症の予防にもいいんじゃないかなと思います。

【委員】

ボランティアルームのことなんですけども、PTAを開放しようということで、PTAの部屋を開けました。オープンハウスみたいなことは難しいでしょうけど、PTAの部屋というのが役員だけの部屋ではないのですが、やはり開けていても敷居は高いようです。仮にボランティアルームという部屋を設けて、どれだけ活用していただけるか、サロンのような感じで、行きやすく、何かやろうとする人たちが集まる、一つのきっかけをつくる場となればいいなと思います。敷居が低くなればと思います。

それから、子どもたちのために自らのやりたいことと、学校がやってほしいということを集集するところから、問いかけることも大事だと思います。できることとできないことなどを整理して、コーディネーターの方が関わってくださることが大切だと思います。うまくいっている例として、読み聞かせだけは、ボランティアの方も学校側も、希望されるとおりだと思います。難しいことを考えてしまうけれども、何か一つきっかけがあれば、活動を充実させ、もっと広げていけるのではないかと思います。

【委員】

基本は学校側からの支援の要請、ニーズに応えるというのが基本なんですけども、私の学校でもやりたいこと、思いをもったお母さん方がたくさんいらっしゃって、例えば、「子どもたちに英語を」という英語ボランティアの方がサークルをつくられたり、お母さん方からのたくさんの方の要請があったんですけども、その時に答えられることもありますけど、「今年は無理なんですけど、今後組み込むことも考えていきます。」ということもあまして、長い目で見て、学校と調整していくことが大切で、そこはコーディネーター次第で、ボランティアの方がやりたいと言っていることを決して学校側がはねつけるということはないのではないかと思います。ボランティアの方と学校とコーディネーターと三者で十分話をするのが大事だと思います。

【委員】

ボランティアに関わってのことですが、ボランティアの方に感謝の気持ちを伝えるというこういう文言を具体的に文字にしてほしくないなと思います。何かこうなってくると、上意下達でね、よそがこういうことやってるから、こういうことをやりなさいということはどうしても

言わざるを得ない感じがします。感謝の気持ちというのは教師の倫理の問題で、自然発生的に出るのが理想ではないかと思います。いろんな人の話を取り入れながら、作成したのはいいけど、「同じようにやりなさいよ」ということは避けてほしいなと思います。自然発生的にお互いができるといいなと思うわけです。

【委員】

ボランティアの確保だとか充実という、地域コーディネーターの力量にかかっていると感じるんですけど、地域コーディネーターというのは有償の仕事なんですか？ボランティアという仕事の中身ではないですよ。もし、ボランティアの地域コーディネーターとしてこれだけ求められるとしたら、ちょっと無謀な話で、やっぱりその予算化というか、やるなら予算をつけてほしいということになりますよね。

言い換えれば、コーディネーターさえいい人を見つけられれば、その地域は安泰という感じがします。ボランティアという組織もできあがると思います。

【委員長】

地域の側からの提案というのは、できる限りというか、取り入れていただくことは大切だと思いますが、ただ、基本は学校の教育活動への協力ということですから、あくまでも学校の運営方針やカリキュラムとか、そういったものを全く無視した提案であれば、それは本末転倒なんですよ。地域からの提案でいいものがあれば、学校の活動に積極的に取り組んでいく姿勢もっていただければ、いいんじゃないかと思います。

自分たちがやりたいと思ったことと学校のニーズがうまくマッチングすれば、学校も子どもたちも、それがいいことにつながるんだしたら、まさに私たちにとっての生涯学習にもなるんじゃないかと思います。

お互いにウィンウィンの関係で、協働の関係で子どもを育てる、ボランティアも育てるのが理想ではないかと思います。長い目で地域を育てていく、それが学校教育の充実にもつながっていくのではないかと思います。

学校という立場からは、いかがでしょうか。

【委員】

まず、昨年度2回の会議で、いろいろと意見を言わせていただきましたが、わかりやすくまとめていただいたことを事務局にお礼申しあげます。

例えばこの骨子を県内の小中学校の校長が目にした時に、主体はどこなのということをもっと考えられるのではないかと思います。私の学校のように既に立ち上がって5年6年と経っているところは、もっと発展させていこうと発展的に考えればいいのですけれど、ゼロのところは、じゃあ、まず、声を上げて、誰がやるの？たぶん学校がやるんだらうなということが聞かれるのではと思います。学校がやるんですよ。どこにも学校がやるとは書かれてはいないですが、書かれてないだけに、裏に目に見えないところに「学校は…」という部分がいっぱい出てくるんですよ。そうすると、まず負担感を否応なく感じます。ですから、県内の校長の半分以上はため息をつく、間違いないと思います。

そもそもは自分たちの学校の子どものよきしたいということ、学校の教員も地域の方もそこ

はいっしょだと思っんですけど、それ以外にボランティアとして来ていただく地域の方、個々の資質も向上させよう、地域の協力もそれも学校に委ねましょうということを暗に言っているわけで、学校が請け負う教育の範疇がどんどん広がっているように思います。本来は家庭教育が担うべきこと、本来は地域で何とかしないといけないことが学校にどんどん委ねられるようになってきています。

ワンクッション置くように考えるなら、学校への押しつけのようなことはしないで、例えば地域の教育力を高めるのは、市町の教育委員会の業務だろうと学校としては言いたい。どこかにそういう文言があってもいいのじゃないかなと思うところがあります。立ち上げようとする学校には市町の教育委員会が全面的にバックアップするというような文言があってもいいのではないかと思います。お金はなかなか出せないけど、「こういうことで人を出せる」だとかいう支援などがあってもいいと思います。

「お金だけ出すよ」と言われても、理想のコーディネーターなんてなかなかいないのが現実です。有償と言ってもこんな人はなかなか見つけれないし、もしおられたとしても既に地域でいろいろな役をもっておられます。

そのように考えると行政の力をお借りするなり、援助をしていただかないとやっていけない。ここに書かれてあることはいいことだと思うのですが、「じゃあ、うちもやってみよう」というふうにはならないところがあります。

【委員長】

どのあたりにどのようなことを書けばいいでしょうか。

【委員】

率直な意見を言いますけれども、まず、お金は必ずあります。

現在、国・県・市町から1/3ずつ補助をいただいているのですが、これが広がっていけば広がっていくほど、一つの団体にいただける補助金の額は、減額されていくんですよ。国の財源が決められている以上、数が増えると、一つの学校に割り当てられる補助金は減っていく。だから、数を増やしていこうとするなら、補助金も増額されるべきで、「やりなさいよ」というなら、補助金をつけるというのが大事ではないかと思います。本校では危機感があり、自主財源の確保に努めていますけれど、本来はやりたくない。資金確保のため、サポーターの方が農作物をJAで販売するんですが、本来はやりたくないんですよ。そういうことに労力を割きたくはないんですが、でも、財源がないのは確かで、となれば自分のところで何か考えていくしかないんです。

小学校中学校は市町立の学校ですから、市町の教育行政が最初から最後まで面倒を見るべきです。学校、地域コーディネーター、学校支援ボランティアという構図があるが、市町の教育委員会も入るべきでないかと思います。

【委員】

私が今の段階で、学校がというよりも学校に勤務していますけど、地域の住民としてなら、もしコーディネーターとしての立場で学校に行くなら、どういうことを今後しなければならぬのかという面から考えてみました。一番最初の「持続可能な」というのは、何を持続可能な

ものにしていくための方策なのか、ボランティアさんの数を持続可能にしていくのか、学校と地域の連携するねらいですね、そのねらいがぶれないように、そのための方策でなければならぬ。学校教育の中に地域住民の方が入っていただくわけですから、あくまでも学校というなかでの、子どもたちに力をつけるための地域住民のみなさんの力を借りるということです、ねらいを共有して、協働するということが根本にないと、ボランティアの数が減ったとか、今年は倍になったとか、ボランティアの数はどうでもいいと思っております。それよりも学校に入っていただくことによって、子どもと関わっていただくことによって、地域から通う子どもに力をつける、すぐにもものさしのようなもので測れるものではないけれども、そういう実感があるかどうか大事だと思います。

すごいコーディネーターはおられない。自分が「コーディネーターとして、してください」と言われても自信がない。コーディネーターさんと学校の管理職・教員が悩みながら、協働していく、お互いの足りない部分を補って、悩みながら協働していくのが出発点・基本だと思います。

【委員】

ボランティア活動の方向性のなかに「感謝の気持ちを伝える」ということがあるんですけども、2つのことが出ていたと思います、わざわざ「お礼の言葉はいらないですよ」というボランティアの方もおられました。でも、折角子どもたちのために活動してくださっているので、いろいろなことを助けていただいて、支援していただいて、それについての感謝の思いを子どもは子どもの教育として、文章にして発表させるというのはとても大事なことです、学校は子どもたちを育てるということからも、お礼の気持ちを表現していくということは教育の一環として大事にしたいと思います。

でも、こういう形で文章に載せるということについては、いいのかわからないですけど。

【委員】

清掃活動などがあった場合に「きれいになりました。ありがとうございました。」の言葉を学校だよりで出されることがありますが、それと同じで、してもらった方がそんなふう「ありがとう」という思いをもたれたら自然に出てくると思うんです。ですから、子どもたちにそういうことを強制していくようなこと、何かしてもらったら、感謝の作文を書かないとだめということではなく、担任の先生もありがたいという思いになってくださったら、子どもたちも自然にそういう感謝の気持ちをもつことにつながっていくのではないのでしょうか。

【事務局】

ここの記述につきましては、これまでの調査のなかから出されてきた意見を引用させていただいたもので、こういった県内の事例があるという捉えで書かれたものです。ですから、決してこうあるべきだということではなく、ボランティアの方々がやりがいや充実感を感じていただくのは、何よりも「子どもたちからのお礼の言葉や笑顔です。」というトーンでまとめていければと考えるのですが。

小学校では、子どもたち自身がお礼の手紙を書くという活動そのものに値うちがあると思っ

ています。それは学校教育活動のなかで出会った方々への感謝の気持ちを伝えるという学習活動を通じて、結果的にボランティアの方々へ思いを届けるということができたなら、そのこと自体に値うちがあると思っております。学校教育活動の営みのなかでのことですから、それは決してこうあるべきという捉えではなく、自然な形で行われることを期待しながら、提案したいと思います。

【委員】

ちょっと抵抗するようですが、アンケートのなかにはいろいろとあがってきたかもしれませんが、答申ということになりますと、どうかなという思いがあるんです。先生としての気持ちはわかるけど、事務局として、県として、少し慎重に扱っていただきたいと思うのです。気持ちは重々わかってるんですが、答申としてはずっと残りますから、学校が負担を感じるようなことは避けてほしい。教員の意識が低いとありますが、先生を責めてどうするんですか、先生も輪のなかに入ってもらえるような文章になりませんかということが言いたいんです。

【委員】

「学校と地域の持続可能な」というところで、ボランティアをすることによるメリットってすごくあると思うんです。学校の様子もよくわかるし、わざわざ行くんじゃないで、先生方とも話せるし、ボランティアを行うことによって得られる良さのようなことを書いておくのもいいのではないかと思います。「学校と地域の」というと学校に求めることばかりが出てきているように受け取れますが、ボランティアをすることの良さ、こういうお礼の気持ちもありましたなどという事例をあげていくのもいいのではないのでしょうか。

そうすると、学校ばかりいう文章にはならないと思います。生涯学習という視点から、ボランティアは自分の成長のためというのも載せると、学校だけを取り上げたような文章にはならないのではないかと思います。

【委員長】

どちらに主体をもって、文章をつくっていくかがポイントとなるのでしょうか。ボランティアにやりがいや満足感を感じてもらうためにはどうしたらいいのか。一方で子どもたちへの教育的な意義も考えながら、どのような記述でまとめていけばいいのか、このあたりは預からしめていただいて、事務局と協議させていただきたいと思いますので、ご了解ください。

さて、ボランティアの裾野を広げていくということについてはいかがでしょうか。例えばお試しボランティアの実施、それから、公民館や大学と連携。ボランティアの募集を公民館を通じて行ってもらいたいいろいろな人にその情報が届くのではないかと、また、学生ボランティアの拡大などです。幅広い情報網を活用して、カルチャーセンターだとか、FM放送だとか、ラジオだとか、いろいろな媒体を使ってやっていくのも一つの方法だということです。

また、一番効果的だという意見が多かったのが口コミということでした。実際に経験している方々が地域のいろんなところで「ボランティアをしてよかった」という思いを伝えていただく、誘っていただくという方法です。

情報をいろいろな方法を使って、きちんと伝えていくということが大事なんです。

【委員】

読み聞かせをした後に、子どもたちに「ありがとう」と言ってもらうのが良いかどうかは話題になったことがあります。私は強制的に言わせるのはどうかと思います。

講座など図書館でもいろいろやっていますので、図書館との連携も入れていただきたいと思います。図書館や県が主催する読み聞かせボランティア講座等も活用していただけます。また、図書館からもいろいろな情報を提供できると思います。子どもは地域の宝であり、地域で育むという意味でも町づくりに関わる自治会、会館の方（守山市は会館にコーディネーターが配置されている）などのお力を借りるのもいいと思います。

【委員】

読み聞かせボランティアに関わってのことですけど、昨日、小学校に読み聞かせに行つて来まして、確かに先生方が「ありがとうって言いましょ。」と言われて、子どもたちに「ありがとうございました。」と言ってもらいましたが、「ありがとう」の言葉でなかったら、他にどんな言葉でしめるのかなと思います。してもらって「ありがとう」という最後の挨拶で別れる、簡単な言葉で、簡単に感謝という気持ちを表せる言葉は「ありがとう」なんです。「ありがとう」で終わるべきなんじゃないかなと思います。学校で何かをした時に教育的配慮を大事にするということでしょうか。

【委員】

ボランティアは、わずかでも「よかったね」という思いや「ありがとう」というまとめの言葉で終わるといいんじゃないかと思います。当然のことだと思うんですが、明文化する、文章に書くと押しつけになるところもわかりますが、小さいお子さんたちでしたら形から入るので、そこに居合わせた大人が「お礼を言いましょね。」と言うところが教育であり、しつけでもあるので、そこをあまり時間をかけて議論をすることも必要ないんじゃないかと思います。

【委員】

先生のなかには、それをされない先生もおられて、それが問題ですよ。びっくりすることがありますよ。先生のなかにはご挨拶もされない先生がおられたりもします。

【委員長】

ボランティアの確保ということでは、ボランティアの講習会をしたりして、人を集めてくる、予備軍という人たち、そこをうまく生かしていくということも大事でしょう。

それでは、最後の「学校と教職員の意識改革」というところなんです。まず、いっしょに考えていこうとする、いっしょの輪のなかに入ってやっていこうとする呼びかけのようなものになるといいと思うのですが、意識改革というとちょっと大げさな感じもします。表現の仕方については、今後、検討していくということにさせていただきます。

【委員長】

(2)の積極的に評価していくというところは、そこまでは書く必要がないのではという意見もあり、ちょっと踏み込んだ言い方になっていますが。

【委員】

この「評価」というのは、どういう評価なんですかね。地域と連携して進めている学校の校長は、大変よろしいというそういう意味でしょうか。人事評価ということなんでしょうか。

【事務局】

基本的には人事評価です。評価として入れさせていただいているのも、今、この場所にいらっしゃる学校の先生方が、積極的に地域と連携されているということは承知しておりますが、先ほど学校側がなかなかボランティアを受け入れないということもあるというご意見もございましたが、こちらから何かをしたいと思っても、積極的に受け入れる学校と受け入れない学校があるからこそ、前回の会議でも出ておりましたように、校長が替わればまた全くやらなくなるという仕組みが存在するというお話もございましたので、それを制度的に担保するには、しっかりと学校を開いていくということに関わった評価、人事評価をしていかないとけないということで書かしていただいたわけです。

【委員】

「人事評価」に踏み込んだ文言を社会教育委員会議という私たちのこのメンバーで、提言するというのは妥当ですか？

【事務局】

社会教育委員会議としての教育委員会への提言ですので、それはできないことではないと思います。

【委員】

じゃあ、私個人の意見としては、それは今回はやめておいたほうがいいと思います。

【委員】

学校の先生方も相対評価から絶対評価に変わっているじゃないですか。そこにはものすごい落とし穴があるんですね。マイナス面もあるし、逆に切磋琢磨し、よりよい方向に向くということもあるかもしれませんが、やはり入れるべきではないと思います。

【委員長】

社会教育委員会としての意見を尊重しながらまとめ、最終的な内容について確定していくものですから、他の委員の皆様にもご意見をお伺いしていきたいと思います。最終的にどういう形にしていくかということは検討していきますが、いかがでしょうか。

【委員】

私もこの文言だけが、これまで書かれてきた文言とトーンが違うような気がします。決して押しつけないで、できることをできる人がやるというところから、最後に学校にこういう形でいくと、今までのトーンが全部崩されてしまうような感じを受けます。できるところからというニュアンスが一気に強制的なニュアンスに変わってしまう一文だなと思います。これが入ると、やらされ感が出てきてしまいます。

じゃあ、これは大事なことだということですから、一步踏み込んで考えると、各学校に「教員を一人つけましょう。」っていうぐらいにできる、「これを行ったら教員を一人つける。」というぐらいのことは、できないのでしょうか。

【委員】

これまでの会議でこういう内容のことが意見として出ていましたか？最終的に学校がイニシアチブをとってやりなさいと言わんばかりに評価するという、そのような委員の皆さんから意見が出たのでしょうか。

【事務局】

そこまでの意見は出ておりませんが、校長が替わった時に学校の構想がごろっと変わっては困るという意見が出ていたことは事実です。それに対応する方策として、例えば考えられるものとしてあげさせていただいておりますので、それが適切でないということであれば、当然削除させていただきます。けれども、であれば考えていただきたいのは、どうすれば学校が常に開かれたものとなり得るかということでございまして、そこが担保されない限り、継続した取組にはならないということです。その方策をぜひ皆様からいただきたいと思うのですが。

【委員長】

人事評価ということを出した意図というのは、校長によってどんどん進むこともあるけれども、変わったとたんにしぼんでしまうこともあるし、人事異動によって、トップが替われば成果が急にしぼんでしまう、それではためだということで、もっと継続的に学校として組織として、維持されていく何か方策はないのかという提案の一つとして、考えていくということでどうでしょう。それに変わるアイデアとかがあれば、いいのでしょうかけれども、私たちから出てきた疑問点、改善点でもあるわけですから、逆に皆さんにどうすれば継続的な取組となり得るのか問いかけていきたいということもございまして、いかがでしょうか。

【委員】

それは私たちが今年度取り組んだことを反省し、次の年に子どもたちの活動にどう生かしていくか、その年その年の教育計画をつくる時にしっかりと入れ込んでいく、そうすれば管理職が替わっても、子どもたちの教育内容というのは継続的に行われ、連続性があるものとなります。課題をまとめて、校長が引き継いでいけば、よい取組は継続されていくと思います。教育内容を十分検討した上で、次年度の教育課程を編成していきますので、そういったことを引き継いでいけば継続は可能だと思います。

それから、「双方向の支援・連携体制の構築」という記述に関わってなんですが、とてもい

いことを書いていただいていると思います。もう卒業しておりますけども「自分たちの未来」という子どもたちが書いた作文のなかで、「ぼくは地域の人々と仲良くして、地域のために役立つ人になりたい。」ということを書いていたのですが、学校へ来てくださる方がとても素敵に見えたんだと思うんです。子どもたちにそういった見方を地域の方が与えてくださっているということだと思います。地域行事に子どもたちが参加する機会も多いですので、地域の方との交流がこうしていいふうに出ているんだと思います。

【委員】

各学校に対する市町の教育委員会の確実なバックアップを約束していただけるか、その辺の教育委員会の関わりが大事だと思います。学校支援ボランティアもバックアップしてもらっているということを感じると心強い。私も一つ困ったことがありまして、学校だけでは解決できない問題が起りまして、その時に市教育委員会の皆さんにいろいろと助けていただいて、校長先生と組織の代表の方とコーディネーターと3人でご相談に寄せていただいたわけですけど、アドバイスをいただいて解決したということもございました。可能かどうかわかりませんが、バックアップをしていただくというのはとても大事なことだと思います。

【委員】

(2)の文言を変えることは可能ですか。例えば、「地域との連携体制構築のための継続した努力」というように、体制が続くようにしようという思いが伝わるような文言にしていくことも考えていただければと思います。校長先生が異動された時の引継をていねいにさせていただくとか、いい言葉は思いつかないですけど、できそうなことをあげて、「努力をしてくださいよ」というような感じでまとめていただければと思います。

校長先生にとっては、この地域のことだけじゃなくて、その他にもいろいろなことを考えて学校運営をされていると思いますので、地域とのつながりだけがすべてではないと思います。社会教育委員の立場からは「こうした体制を維持してください。」ということが伝わるようなニュアンスでまとめていただければいいと思います。

【事務局】

「学校と地域の持続可能な連携方策」についてという視点で、体制を維持していくための方策というところに絞ってまとめていければと思います。これまでの会議で出されたきた委員の皆様のご意見をもとに、学校の負担感が増すことのないよう、特定の誰かが負担を抱えるということのないように表現にも留意し、この学校支援本部事業が継続して取り組めるようその仕組みをどのようにしてつくっていけばいいのかを中心にまとめていければと考えます。

【委員】

今ほど事務局の方からご説明がありましたが、私も皆さんの貴重なご意見を聞かせていただいて、昔から学社連携と言われておりましたが、難しい問題だなと思います。特にこの学校支援本部というようなことが出てきてから、特に難しくなってきたなと思っています。

今回は、諮問を受けての答申ということになりますから、どうしても行政的というか、難しい言葉を使って、たくさんのことを書かなければならないと思うんですけども、やはり、これ

を読んでいただく方が、それなら私もやってみようとか、まねしてみようかというふうに軽い気持ちで読めるような答申、答申というよりは提言というのがふさわしいんじゃないかと思うのですが、前回の資料で円グラフとかいろいろな資料とかがありましたが、写真とか入れて、答申らしからぬ、わかりやすい提言のような形にまとめていけるよう事務局の方に力を貸していただければ、非常にありがたいと思います。以上のようなことを感想として思いました。

【委員長】

ありがとうございました。最後の方はいろいろなご意見をいただいて、社会教育委員会議はこうでないいけないと思えるような、たくさんのご意見をいただきました。その分宿題も増えたわけですが、事務局も含めて、もう一度まとめ直していきたいと思います。

今回は、この骨子が文章になってくると、皆さんの受け止めも変わってくるかもしれませんが、できれば、先生方や地域の人に広く読んでもらえる答申というものをつくっていきたくと思いますので、ラストスパートということになります、これからもぜひご協力をお願いいたします。

次の第4回の会議は、細かい日程がまだ決まっていないようですので、追って、正式な日程等は事務局の方から調整させていただくことだそうです。それまでには、事前に皆さんには見ていただいて、次の会議を迎えたいと思いますので、どうぞよろしく申し上げます。

それでは、事務局の方にマイクをお返しします。

【課長挨拶】

本日は熱心な議論をありがとうございました。冒頭に委員長から今日はラストチャンスという話がありましたけども、ラストチャンスではなくてですね、今日いただいた意見を踏まえて、修正をいたしまして、また、見ていただいた上で、次回の会議にもっていただければと思います。また、この学社連携の話はこの答申に盛り込まれているわけですけども、他に生涯学習課で担当するものとして、家庭教育の他、生涯学習全般の事業もございますので、来年度に向けた施策も検討して参りたいと思いますので、皆様方の日頃の活動のなかで、県教育委員会へのご希望があれば、ぜひとも個別にでも結構ですので、ご意見をいただければと思っておりますので、よろしく願いいたします。

本日は、ありがとうございました。